

# 剥き 産み

【試し読み版】

9,286 字

Man had nothing to do with Him.

Sojourner Truth

1851.5.29 Akron, Ohio

男は神と関係してないんだよ。

ソジャーナ・トゥルース

オハイオ州アクロンでの演説

欠かかれてしまった。逝いかれてしまった。とおいとところに往いかれて、しまつて、追おいようもなくなくなつた人に取り残されたのがおれと、これだ。漏しれた潮音おねもすべて乾かききつてしまつた、おれたちが吐ついた、吐つかせあつた、呑のみ込こませあつたものたちもすべて炭化たんかして絶たえた、のだらうか。

思おい出いせるべきだ。おれは思おい出いせるべきなんだ、やつとおれとの益えき体たいなさを、貧ひしくみじめな身解みほどきを、そうだおれたちは生なまれついたこの肉あひらを嗤わら笑わらつた、飽あいた倦あんだと言いつて平へい氣きだつた。黴かびた膿うみの二ふつ身みが生なんだのが、あの様さまもない徒事あだごとたちだつたのか。やつの身体しんたいを舐なめた、はずだ、目蓋めがねかすかにも見開みひらいた、やつの銚かすがい色いろのひとみが好きだつた。ふたつぶつけて繋ついで接あいだ、口くちが舌したがその銚かすがい先さきが、ふたりの挿すげた痴態ちたいを編あんでいた、その舌したの挿すりですら、もう思おい出いせない。やつの腔くわうはどんなだつたか、角つのばつた齒はに裂ひかれて疾ちつたのか、艶鉄味つやてつあじの唾つばに混まじつた、血ちの漏もらりに塗ぬられたおれが。

なめていた。ずいぶんなめていたことだ。おれが身体を舐めていたのじゃない。おれが身体になめられていた。もう一夜とはめくれない、紛れごとくにさえ賭けて張れない、身体の巨きな思いが、おれの蔑しをあざむいた。どうしてこうも思い出せない。やつとの夜毎の由無し事、明くれば仕事と知りつつ飽きなかつた睦み事どもを、選り束ねることができたなら。しかし尚も思い出せない、あんなに重ねた皮が、髀が、日々が、口に代わつて喋つてくれたら、おれも「そうだ」と唱和できたのに。しかしこの一つ身しか残されない、やつとの遺骸は往つてしまった、あの不埒な生活の残骸の前で、おれだけが月に睨められた。

作家が死んだ。病むに病まれて死んだ。梶病だそうだ。詳細は知らない。なにしろ致死の病はすべてクヌギビヨウと呼名されているのだし、築宅の人々が作家の宇を焼き払つたのも即妙なことだった。やまいだ、死をひろげかねんやまいだ、やかなければ。そうして焼かれた。そのようになつた。ただ灰と白骨だけをとどめた、

ばかりではなかった。病を媒なこうだ肉は塊くれた、がやつのみとみと同じ色した箱が、なんのあてつけか、のこされた。

ブリキだろうか。大蝗害前に地上で流通していた金属には違いない。身と紙たちを焼いた喰み蝕みほぼの中で、この箱は焼死をのがれてのこっていた。のこそうとした、のだろうか。ほかの原稿たちはすべて焼かれてしまったはだかのままで。見せてもらった読ませてもらった言葉たちはまるで思い出せない、当然だ、じかに肉に書き込んだ言葉ですら憶えていないおれがどうして。しかしそうだ、確かにあの言の葉たちは寿ことほいでいた、何を？ 知らない、しかしおれの与り知らない種々くさくさをだ、ほめていのように思われたのだ。しかしその詩々をすら思い出せない、その紙々をすら焼かれて跡形ない。

ブリキの箱を開けた。紙だ。のこっていた。詩、だろうか。思い出せるべきだ。昨晚読んだばかりなのだから。どうだったか。なにをうたっていたのだったか。思ひ出せる、それはたしかこういう感じだ、

なぜならお前は 誰かから産まれ、

お前も誰かを産むのだから。

末尾の句だった。「お前」とは誰だろう。いったい誰に捧げられたものなのか。しかし、それにしても。文体がやさしい。本当にやつが書いたものなのか。寄贈されたものではないのか。しかし誰によつて？ この地上で、やつの他に紙に取りすがっている人間がいたとでもいうのか。その人から、贈られたとでも。まさか。

やつの書き言葉と話し言葉とどう違う。あいつはあいつとして話していた。そうだ、あの毒溜む不埒な言い方で弄ぶのだ、おれがなにも言い返せないのをいいことに。しかし、やつの原稿は、誰に目掛けられていたのか。そもそもやつはやつとして書いていたのか、名前に身を襲して書く、以外のやり方で書く、ことができる？ 無体だ。どうしてそんなことができる、と、おれは思ったのか。おれがなにを知っている。言葉に寿がれなかつたお前が、やつの試みに対して一口挟もうなどと、恥ずかしいとは思わないのか。

「一三七番」

と。

「一〇分間休憩」

帽子をとる。礼する。慣れた挙措だ。頬を撫でれば汗が粒だった。もう夕べか。いくら夏がすがれて久しいとはいっても、瀝青に塗り込められた工場では風通しもなかつた。最後の一枚をコンベアに流し、セクション一二を出す。しかし、それにしても、何に使うのだろうかあの鉄板。どこでどのように使うのだろうか。わからないし、わかる必要もなかつた。ただ家が建てばいいのだ。かつてのように蝗に喰われないための家が。アルマイトの家。誰が住まえるのかは知らない、少なくともおれではない。

幸いにして食堂は空いていた。いつものように袋から一〇蝗取り出し、「水団」じゅうごうと注文をとる。いつものように。ここでは時間が平らだ。椀を受け取り席につく。今日も湯沸かし器が壊れている。いつものように。あたたまるには水団しかない、

工場の中は灼熱だが、ひとたび外に出れば底冷えがするのだから。雲呑わんたんの温みが舌をほぐす。塩汗が喉を洗う。生きている気がする、ような気がする。

おれの親の代か、あの大蝗害にまみえたのは。とにかく何もかも喰われた。毀たれ、焼かれた、というのは正しくはなくて、「イナゴもろともに燃え落ちた」がそぐわしい。イナゴの波を焼いて捨てようと試みたら、みずからの文明もろともに燃え落ちてしまったのだった。こればかりはどうしようもなかった。有機体への急激な劫掠というやつだった。

蝗害後、とりあえずイナゴの死骸ばかりがあまっているのです、これを分配して通貨として扱おうという次第になった。なんでもよかつたのだ、あまっていれば。糞こんちちでもよかつたのだらう。じじつ糞とは貨幣なのだ、糞でなくイナゴが今日まで貨幣として信用に堪えてきた理由なら、「飢えたとき喰えるから」の一事以外にはなかつたろう。じじつ遠方の築宅ちくたくでは糧秣の支給がゆきとどかなくてイナゴをじかに喰

つて繋いだという話を聞く。交換可能な糧秣が届いたときには貨幣であるイナゴが手元に残っていなかったと。笑い話だ。

糞に似たもので食い物を買って肚はらのなかで糞にする、とぼんやり口にしてみると、なかなかリズムがあつておもしろい、リズム？　またおかしなことを言い出した。おれがリズムのなを知っている？　そもそもどこの言葉だ、これは？　蝗害前、世界の言語は一つではなかったと聞く。ずいぶん不便な暮らしたつたろうと思うのだが、りずむ、この三音はどうも、浮いている気がするな。おれが普段はまこうして考えて口にしてある言語とちがう、なにか、刺さつているといふか、撓たわめられて嵌はまっているというのか。似た言葉を探してみよう、ふむ、踏む、かかどがしずみこむ、地に泥なすむ、つまさが先んじて砂利ずむ、じやりと鳴る、鳴く、吐く、拍か。拍？　そうだ、やつが言つてはいなかったか、「リズムと拍とは別のものだ」と。いつ聞いたのだったか。どの夜だ。どの枕の……？

しまった。

「セクシヨン一二に」

もう十分か。腕の半分も食っていない。いつもならたいたらげるのに。喉に押し込む。じゃがいもだ。よく煮えている。戻らなくては、

「築宅ちくたくさんありがとうございます」

「築宅ちくたくさんありがとうございます」

瞬く間に終礼なのだ。今日はやけに早く終わった気がする。時刻はいつも通りなのに。考え事ばかりしていたせいか、それともまだ響いているのか、やつの死がそんなに尾を引くのか。何様だ、という話にもなる。おまえはただの客じゃないか。偶たまさかに知り合っただけの男娼に、おまえが喪に服す権利があるとも思ふか。その損失を惜しむ、権利があるとしても。

「お疲れ一三七番」

「お疲れ」

帰ろう。帰らねばならない。夜の寒気は堪こたえる。そうだ、宇うちに薪はまだ十分にあったか。市場はまだあいているか……わからない。足りなくとも、明日の朝はやくに買いにいけばよからう。いざとなればイナゴをくればよい。なにしろたいへんによく燃えるのだから。

「ただいま」

返事はない。慣れている。囲炉裏を見る。さいわい今夜をしのぐだけの薪はあった。麻袋の中、きゃべつとじゃがいもと干し肉はある。適当に切つて茹かたでればよい。なんの肉かはよく知らないが、とにかく野菜だけで母胎を支えるのは難かたい。滋養のつくものがなければ。

「入るぞ」

といつて返事があるわけでもない。気にはしない。鍋を床におき戸を開ける、入る。莫塵のうえに鍋をおき、食器どもをかちやかちやと運ぶ。

「置いとくから」

表情をうかがう。小さくうなずいてくれた。視線を落とす。その下腹が寝巻きを押し上げて見えた。

「ひとりで、くえるか」

小刻みにうなずく。うとわしげな。かち、と弾ける音とともにおたまをひつたので、とりあえずお椀を持ち上げてわたす。鍋の近くに尻を引きずる、のが見えたので鍋のほうを持つてやる。蓋をあけると湯気が吹く。馥郁ふいく、とは言いがたいがとりあえずの夕餉ゆうげだ。

「うまいか」

うなずかない。そうだよな。うまくはないよな。でもとりあえず、それで飢えることはないはずだから。胎はらのほうをみる。四ヶ月目だったか。ずいぶんふくらむものだこの身体は、おれとは違うこの身体は、これは、一体どのようにして、

「触んなよ」

叩はたかれた。音が遠のいた。目の前にだらしなく垂れている、手に拒まれた手がこれのものだったことに遅れて気づく。かちゃん、と、これは箸の落ちた音か。そうか、おれはまた余計なことをしたのか。

「すまん」

箸をひろう。汲まれた桶の水でとりあえずすぐ、わたす、受け取って、くれる。よかった。すまなかった。

「平気か、身体は」

とりあえず、場をつなぐだけの言葉。塩汁のように味気ない言葉でもないよりはマシだった。

「兄にいちゃんさあ」

応えてくれた。よかった。ああ、何日ぶりだろうなおまえがそう呼名よびなしてくれるのは。

「知ってるよね、あたしのハラん中のが、あいつの子じゃないってこと」

「ああ」

知っている。というか、お前が言ったのだったか。築宅ちくたくさんにもらわれて、随分はげんだと聞いていた、がついには何も宿らなかつたという大意のことをずいぶんやくざな言い方で聞かされた気がする。それもひと月以上前か。

「築宅ちくたくさんじゃないんだろう」

「というか、そもそも勃たねーんだよアイツ。虫も犯せないようなほつそいもんどぶらさげやがつてさ。それで毎晩テメーがいつぱしの男ですみたくに振る舞うんだからほんと笑えるわ」

「へえ」

「もしイナゴとアイツとどっちとハメる？　って言われたら願ってもなく前者だね。ああ、うわー思い出したわ、アイツ勃たないに事欠いてなにしでしたか言つたつけ？」

「いや」

「こつちのまたぐらに鼻面突っ込んで、ワレメのどこで、なんかお子をおーとか、賜りませんことをおーとかき、言つてんの。えつ何してんのつてさすがに訊くじゃん。そしたら「言葉は命だから、言葉で孕むから」つて」

「はは」

「こわ。こえーよもう。あんなのがこの地上とりしきつてゐるつてもうおしまいだよ、股のまんも勃たねーようなやつがあたしらの家建ててるなんて、冗談でもキツい」

「おれらの、ではないけどな」

「大体なんなのあれ、なんのために建ててんの、兄ちゃんなんのために働いてんの」

「さあ……」

なんのためにつて、稼ぎのためだ。イナゴの。いや、そういう問いではないのか。おれの働きが一体だれのなんのためにということか。なんのためか。少なくともおれのためではない、おまえのため、だけでもない。

「おい」

腕が差し向けられる。空だ。注いで、渡す。

「で、訊かねえの」

「うん？」

「あたしのハラのが誰の子なのか。誰とハメてできたのか、訊かねえの」

「いや、別に……」

床を見つめるしなくなる。なんでも明け透けに話してくれるのは兄ちゃん嬉しい、が、子をつくる能力のないお偉いさんにもらわれたあげく他所から子種をもらってきた妹の身の上など、迂闊にも聞けるものでは、

「馬糞だよ」

ばふん。

「馬糞。兄ちゃんの工場にいんだろ」

いる。あいつか。櫛病のために一面ごと焼き捨てられた農場で、誰も寄り付かない厩で寝泊まりしているあの。まともな言葉を話さなくて、凶体ばかりばかりでかくて、とりあえず身体はこわれにくいようだというのでセクシヨン九に回されている、

「あいつか。あいつか……しかしどうしてまた」

「どうしてつて、築宅ちくたくなんぞの子なんか絶対に産みたくねーつて思ってたし、実際勃たないわけだし。じゃあ別のやつからもらつてきて、あたしの子を玉座につけてやりゃあいい、つて思つてさ」

「玉座つて、大げさな」

「大げさじゃねえよ。あたしの子つてことはあいつの子で、つまり次の築宅ちくたくを継ぐ子になるつてことだろ。だからさ、この地上で一番サイテーな種、そいつを孕んで届けてやろうと思つたわけさ。もともとクソダメみてえなこの地上だ、ならクソみてえな人間に継がせるのがふさわしいだろ。それがアイツだったわけ。病気な土地で寝泊まりしてる病気なやつ、馬糞」

まあうれしそうに喋る。うちの妹は。

「ふしあわせなことをするもんじゃない」

「は。なんだよふしあわせつて。びびつたわ、兄ちゃんそんなぬるつたいこと言う人だったつて。あたしのしあわせなんか知つたことかよ。今はこのクソダメの話を

してんの。兄ちゃんが毎日働きに出て、あたしはどこの馬の骨とも知れんやつにも  
らわれなきやいけな、そういう床とこ、ここだよ、ここ」

ここ。床とこか。そういえばやつつの詩にも似た表現が見えていた気がする。なんだつ  
たか。

「実際さ、兄ちゃん、この地上になにも文句ねえの」

「文句か」

あるのだろうか。日々の労働がづらい、と言えば嘘になる。むしろ心地いいので  
はないか。決まった時間に出て、決まった時間働いて、似た時間に食って、似た時  
間に糞をする、この規矩が辛うじておれを生かしてくれていると感じたのは二度三  
度ではない。

「あたしはあるよ」

おれは在れなかった。そう在れなかった。妹のように、あの作家のように、なん  
らかのかたちで世界に切っ先を剥いて在ることが。

「だから産んでやるって決めたんだ。あたしの部分を連中の鉄火場のために供するなんて、冗談じゃない。とっておきの鬼つ子を産んでやるよ。せかいじゅうの病気を万引きしてまわっても足りないような糞餓鬼をね」

「鉄火場」と言った。「鉄工場」ではないのか、築宅ちくたくのことを揶揄しているのならそれは。わからない。いちいち言葉の機微に通じているおれではない。やつならば、妹の一語一句を添削なり批評なりできたのだろう。しかし言葉に見放されたこの兄にはおぼつかない。

実際似ている、やつに、妹の舌ぶりは。その鋼めいたつめたさ堅さが。鋼めいている、と？　あまりに軽率な比喻ではないか。ひどく熱しても耐えうるとでも言うのか。燃えてなくなったではないか、やつの遺骸は。遺稿は。消し炭になって塊くれ果てたではないか。なにが鋼なものか。やつは生きていた。有機体だった、おれと同じ、焼かれれば炭になるしくみだった。生きていたのだ。妹と同じ、その胎のなかにいる稚児ややくと同じようにして。生きていてほしかった、今もこうして。やつは何を遺したかったのだろう。あのブリキの箱ひとつで、なにを伝えたかったのだろう。

あるいは、生きようとしたのだろうか死後においても。女性が子を産むように、こんなにも焼かれ潰えやすい紙片をのこして、生き繋ごうと。とすれば、

「わかるな、それは」

わかる気がするな。やつと重ねた二つ身のむなしき益体なさが、書くことへ掻き立てたのだとしたら、こうして在ることとは別の死後の永生を

「知ったふうなこと言うな」

のぞん、

「なにが「わかる」だよ。わかってたまるか。あんたに何が産めんのさ。あんたとなんの関係があんのさ、それが」

目がさめる。さめる？ いや、寝ていたのではない。しかし、おれはまた

「迂闊なことばつか言いやがって。ちよつとふざけすぎなんじゃないの。兄ちゃんちよつとおかしいよ。そんなにだらしがない人だったつけ。そんなにだらしなくしあわせとかわかるとか言い出す人だったつけ。なんか自分はなんでも受けられる皿で

すみたいな顔してるけどさ、それ、腑抜けだよ。キモいつてそれは。なんだよ、おかしいよなあ。だって毎週男のここに行つてた頃は違つてたろ」

「おい」

何と言つた。なんと言われた。

「知つてたのか」

「知らねーと思つてたのかよ。気づかないわけねーだろ、晩になるとこそそこそ出かけてさ、急に血色よくなつたしき、なんかやけにピンとしてたじゃん。猫背じゃなかつたよ今みたいに。だからなんかなーと思つてたら、まあイロだな、いい男娼の一人でも見つけたんだなつて」

「え、おまえ、そこまで」

「そこまでは知らねーと思うよ、そこまでは。ただ有名だからね、恥街はじまちのやつだろ？さすがに築宅ちくたくで働かずにやっていける男娼つてなるとき、風の噂にもなるしさ」  
そうだな、それは。ああ、それはそうだ。やつがおれ一人を相手していたわけがないのだし、専業男娼ならばなおさらだ。いや専業ではない、なんだ専業男娼とは、

やつは作家でもあった、し売春もやっていた、だから途方もない数の客と関わりを、それだけのことで、それだけのことで、だのになぜ。

「え、なんでそんな顔してんの」

なぜだろう。やつとのがうまく思い出せない、からではない、妹の言にぬるい共感をみせてしまった、だけでもないのだろう。そうだ、おれは産むことは何関係がない、子どもも言葉も孕むことができない、おれは何も産むことができない。たつたそれだけのことに、わかりきっていたはずのそのことに、こんなにも狼狽しているのか。おれはもう、

「わからない」

何もわからない。何もかたがつかない。

「あかさ」

目がさめる。いや寝ていたわけではない、しかしずいぶん長いこと押し黙っていた気がする。何分経ったのか、そろそろ眠らなければ明日の支障に

「ちよつと訊きたいんだけどさ、マジでわかるって思ったの？」

なるから、もう床に

「なに？」

「さつき言つてたこと。あたしが文句があるから産むって言ったことがさ、兄ちゃんのかなかと関係があるって、わかるって、マジで思ったの」

わからない、とまた鸚鵡のように繰り返してしまえばそれこそ不興だろう。答えなければならぬ。

「いや、そうだな、なんというか、」

「なんというか、なに」

「その……思つたんだ。おれも、おれも何かしなきゃいけないはずだって」

「産むことを？」

「そういう……ことを」

どういうことを？ 死後の永生を望むでもなく、今生きてあることに抵抗しない  
のでもなく、それでもなにかをしなければならぬとしたら？ 何をすればいい、  
どういうふうにか、

「じゃあさ」

するべきなのか、

「ほんとに産む側の気持ちになりたいってんならさ、」

投げわ、たされる。細長いものだ。錐きりだ。なんでこんなものが。たしか寝台を工  
夫したときに使ったのだったか。こんな尖りものを妹の閨に放置しておくとはなん  
という

「血い流してごらんよ」

手ぬかりか、

「血」

鸚鵡返しになる。

「そう。どういうつもりで言ったのか知らないけどさ、でも一つだけ確かだよ、血を流すことなしに、産めるわけないってこと」

血を流すことなしに。そうだな、おまえはたしかにずっと、月のものに耐えてそうして

「痛いよ。できんの？」

できるのだろうか。錐をひろつてみる、逆手に持つて先端をたしかめる、その先を、左腕のうえにでもあててみる。

血を流すのか。切つて、開いて、血を流すのか。わかるのかもしれないそうすれば。産みの痛みが、孕む側の気持ちか。しかしどうなのか、どういうふうにすればいい。どれだけ流せばいいのか。何も知らない、おれは何も知らない。妹の身体にだつて無頓着に生きてきた。他の人間にだつてそうだ。ともすれば、自分の身体にもか。おれの身体がおれのものであると、一度でも思ったことがあるのか。とすれば、この肉を切つたところで、おれの身を切り開いたということになるか。その痛みがおれのものである、ということになるか。

「できない」

おろした。ころ、と錐が転げる音が間抜けだった。腑抜け、おれは腑抜けか。そうに違いない。おれは何も知らない。自分のことも誰彼のことも、何もかもがおぼつかない。

「すまなかつた、妙なことばかり言つて」

立ち上がる。眠りが呼んでいる。明くれば労働だ。異議はないし余儀もない。

「先に寝るよ。鍋、余つたら蓋しといてくれ。明日の朝雑煮にしよう」

ず、と莫産をひきずる。おれの背中にどんな侮蔑の視線が注がれているのか、を考えるだけの饒ゆとりすらなかつた。戸を閉める。寒気がしのびよる、ような気がする。

綿布団だけではさすがに肌寒くはある、がもうどうでもいい、眠れさえすれば。枕に目をつぶされて落ちたい、が阻まれた。ごつ、と金属のさわりが鼻を打った。忘れていた。やつの。

ブリキがにぶく照る、いかにもくらい、電球の明滅が紙の上に陰をおとす、なかで読む。

夜に浸された指で書けるか。

骰子さいころが落ちない床で賭けるか。

骰子さいころが落ちない床、か。それならなぜ骰子を放る必要がある。落ちないのなら、その結果を見届けられないのなら、どうしてわざわざ一擲を賭ける必要がある。だれも賭けの勝ち負けを立証してくれないのだとしたら。だれも自分の死を吊つてくれないのだとしたら。

もしお前が一滴を、一擲を敢えてするのなら、

尾が頭にならないあの車輪の、ひと擦れに託ことづけたことになる。

尾が頭に、なんのことだ。わからない、しかし意味はあるのだろう。そのように書かれたはずだ。なぜそう思う？ それもわからない、しかしやつが無意味な言葉に興じていたのだとしたら、売春のかたわらの手遊びにものを書いていたにすぎないのだとしたら、なぜおれがこの一編に執着しなければならぬかがわからなくなる。なんのために書かれたのだこれは、なにを目掛けて、どこへ届けるためになる。すくなくとも届いたとは言えるのか、おれのところに。わからない。なにもわからない。

眠らなければ、と紙片を戻そうとする、が部屋の暗さに取り違える、箱が落ちる。拾わなければ、と、床に見知らぬものが転がっている。拾い、弄いぢうと、これは。ペヨトルだ。それも白銀の。これも遺っていたのか。箱のなかに隠れていたとは。

しかしなぜ。これを遺す必要があつた紙片とともに。わからない。おれは男娼として、のやつ顔しか知らない。どう生きていたのだろうか。このペヨトル一果を調達するためにどの角々に顔を出したのだろうか。あの恥街はじまちで、どのように生きて、死んでいったのだろうか。

## 自家通販受付中

1 : [integralverse@gmail.com](mailto:integralverse@gmail.com) 宛に件名「通販希望」と記したメールをお送りください。本文にはお名前 (Twitter アカウント名等でも可)、二部以上の購入をご希望の場合は部数をご記入ください。

2 : お送り頂いたアドレス宛に通販のご案内を申し上げますので、ご確認頂いたうえで手続きを進めてください。

**<http://avvajp.web.fc2.com/bb.html>**